

の個人に委ねられた問題でなくむしろ市民全體の問題であつた。それは客観化され學問化されるべき問題であると共に、日常性の問題であつた。だから詩の中に劇の中に、物語の中にも、それは顯現する。著者の鋭い眼は、所謂國家論と表題をもつもの以外にも、希臘人の國家思想を見逃さなかつた。吾々はここに深く日常性に根ざした希臘的國家思想、法思想を見出すであらう。又同時に所謂希臘哲學理解のためにも多くの背景をみるであらう。國家の問題が「理論」でなくして「生活」であるべき今日、本書に展開された希臘國家思想は、單に學問する者のみに興味を喚ぶのみならず、廣く一般人の教養を深める上にも一讀するべきであらう。

最後に、本書は再刊の辭にもあるやうに、著者の第二、第三のギリシア史研究と一聯の全體を構成すべきものの一である。既にその第二は上梓中ときく。出版される日も近いであらう。その時は又改めて本誌をかりて紹介の筆を執るであらう。(創元社發行、菊版四六二頁、定價五圓)(井上碧勇)

### 世界史への斷想

原 隨 園 著

本書に收むる處のものは、史學理論「歴史」を初として、二十七篇の論文隨想である。

而して著者は、其「序に代つて」の中に於て、「歴史に徹するといふことは、唯過去の事象を記憶することではない。過去の成敗の

跡を鑑みることである。」而して吾々にとつては、「先づ第一に、悠久三千年に亙る歴史を我々の實踐の地盤とすることである。國史を學ぶ所以は、實に茲に眼目がある」のであるが、然し、「國史が我々の實踐の地盤であるやうに、世界の諸民族は、それぞれの歴史を地盤として有つてゐる。」従つて、「萬國の古今を通觀するところに、自ら博大なる視野が開かれる筈である。」而も「廣き世界的識見を持つとは、將來の日本人悉くに期待されねばならぬところである。」更に「歴史を學ぶのは斷じて、過去の事業を記憶することではない。自己の實踐の地盤とし、自己の血となし、肉となすために學ぶのである」と述べて居られるが、又以て、著者が本書に於て、如何なる課題を撰び、且何を訴へ教へられんとするかを窺ひ得るであらう。

著者は又、其一論「外交」の中に於て、「古典古代を彼等歐洲人が交通の財産として有つてゐる。我々は、それ故に、歐洲外交の性格を掴むためには、古典古代にまで遡る必要がある」と説かれる。著者は謂ふ迄もなく、吾古代希臘史の權威ではあるが、然し日頃其指導を受けつゝある吾々は又、先生の廣く世界史全般に對して有せらるゝ該博にして而も深遠なる高見に對しても畏敬措く能はざる者であり、必ずしも問題解決の鍵の總てを古代希臘にのみ求められるものでない事は、茲に縷説を要しない處であるが、而も尚、諸問題解答の根源を、古典希臘に求めらるゝ事如何に多きものあるか、首肯されるであらう。

照して「世界史への斷想」と謂ふ。著者が、今日旺に論議せられ

つゝある世界史の問題に就て觸れられる處は、最後の「世界史と日本の使命」の最初の部分に留まり、本書を通じて讀者は、其卓見を充分に知る事は出来難いけれども、然し此書に收むる處の諸論篇悉くが、新しき世界史を創らんとしつゝある、吾々に示唆する處大なるものあるは信じて疑はざる處である。

蓋し、著者探はれし處の論題は、所謂歴史のなものと、みではあるけれども、然し其等は、世界的日本が、今日切に解答を要請しつゝある問題と緊密に繋るが故であり、又其解決其物が、唯徒らに懷古趣味を満さんが爲の史實探究にのみ終始してはゐないからである。

此紹介の出る頃、恐らく讀者は、爽涼の氣満つる燈火の下其塵筆の跡を辿りつゝ、「政治家の理想」、「外交」の要諦は如何ある可きか等々の諸問題に就て、徇逸歴史を通じて具體的に教示せらるゝ處洵に多大なるものあらうが、就中私は、歴史に於ける自由と必然の關聯を説ける「イアベトスの一族」、及び、現下愈々重要性を増しつゝある石油、鹽の歴史の意義の展開を教ふる「燃ゆる水」、「鹽」等の諸篇の中に、特に著者の優れたる見識と敘述の筆を見出して敬服せる者、唯私一人のみではない事を確く信する者である。

(定價貳圓五拾錢、創元社發行、西井克巳)

## 獨逸中世史研究

上原專 譯著

ドイツ中世史に關する七篇の論文から成り立つものであるが、大別すれば史料研究的なものと問題研究的なものゝが略々半半ばしてゐる。中世史料の文獻學的研究は、殆んどその過程から十九世紀の歴史學が生長してきたといつてもいい程、與行の深いものでありまた範圍の廣いものであるけれども、わが國においては種々たる事情から、就中研究上の技術的困難の大きい割合に歐米人のそれに對比しうるだけの結果を挙げ難いといふ點から、學者が自ら進んでこの難路に踏み入つて目に見えない地下の作業に従事するといふことは極めて稀であり、現にそのような作業をするために必要な準備勉強さへも充分に出来てゐないといふことが遺憾乍ら現在までの實狀である。この點本書の著者上原教授は誠に異色ある存在といふべく、夙に維納のドプシュ教授の下において中世史科學の研鑽を積まれ、歸朝後中世史料の根本についてその翻譯並に研究の事業を起され、その成果を謄寫版刷にして諸大學の研究室に配布せられるといふ如き辛酸なる勞苦を續けられ、誠にその志の實ならざること後進の徒をして感奮せしむるものがあった。本書に收められたものは恐らく斯の如き教授多年の研究の一部分にすぎないものであらう。而もこの種の史料研究は極めて少數の専門家の間に理解せられるに止つて、一般の興味を喚ぶこととは望み難いことであるかも知れないけれども、教授の學風を最もよく傳へるものとしては本書に收められた「ゴードエク・ス・ラウレス・ハマンシス」以下の三篇は特筆せらるべきところであらう。先に本誌に紹介した久保正幡氏のリプアリア法典の翻譯研究等と